

自然との共生と生活の知恵から 地球環境を守ることを学ぶ ～「サマーキャンプ in ぎふ2009」を終えて

米日教育交流協議会 代表
丹羽 筆人

今年で4年目を迎えた日本語・日本文化体験学習プログラム「サマーキャンプ in ぎふ2009」は、不況、円高、新型インフルエンザの逆風が吹き荒れる中にもかかわらず無事開催することができました。日本語学習中の子女をお持ちの保護者の皆様や日本側の受け入れ先の方々に、過去3年間にわたる活動の成果が認められてきたのだと嬉しく思っています。ここでは、今年の「サマーキャンプ in ぎふ」の実施報告をさせていただくとともに、4年間にわたって取り組んできたプログラムと現代社会の重要課題である地球環境問題との関連について触れさせていただきます。

サマーキャンプの概要と目的

「サマーキャンプ in ぎふ」は、岐阜県の西部に位置し、滋賀県と福井県に接する揖斐川(いびがわ)町で、2週間にわたる体験プログラムを2回行っています。今年は7月2日から16日(第1期)と7月22日から8月5日(第2期)に実施しました。第1期には小学4年生から高校2年生までの18人、第2期には小学4年生から中学3年生までの10人が参加しました。毎年全米各地に在住する子女が参加するのですが、今年はカナダ・英国・中国からの参加者もあり、より国際的なものになりました。第1期・第2期ともに、築150年の「かやぶきの家」での古民家生活体験、禅宗の寺院での寺院体験、地域の住民の家庭で過ごす地域生活体験(ホームステイ)の他、元小学校の建物を改修した宿泊施設「ラーニング・アーバー横蔵・樹庵」を拠点に、スポーツ交流や伝統工芸体験など各種体験を行いました。第1期では、地元の小中学校、高校での学校体験も実施しました。

このキャンプの目的は、これらの体験を通じて日本の文化を吸収することにあります。ここで言う日本文化とは、伝統的な芸能や芸術のみを指すのではなく、日本人の生活に根付いた慣習や生活の知恵を指します。その中で特に強調しているのが「ものを大切に作る心」の育成です。そして、その体験を通じて、参加者は元来日本人の生活は、豊かな自然を上手に利用していたことに気づき、環境保護の大切さも自然に学んでいます。

「かやぶきの家」で学んだ自然を利用した生活

サマーキャンプの各期において、2泊3日もしくは3泊4日で行っている古民家生活体験では、築150年の「かやぶきの家」が活動場所となります。かやぶきの「かや」とはチガヤ、ススキなどイネ科の草木のことで、古来より飼料や燃料、屋根を葺くための材料として使われてきました。稲や麦とは異なり、油分が多いため水をはじくという特性があります。従って、特に住居の屋根の材料として適しており、農村では積極的に栽培もされていました。自然の植物を有効利用するまさに生活の知恵です。また、「かや」で屋根を葺く作業は多大なる労力が必要ですので、集落の各家がお互いに助け合って共同で



行う習わしになっていました。それによって、住民同士が固い絆で結ばれていたのです。

この「かやぶきの家」のある揖斐川町坂内地区は、福井県と滋賀県の県境近くに位置します。トンネルがない頃には峠をいくつも越えないと他の集落には行けませんでした。従って、自給自足の生活を送らざるを得なかったのですが、その生活を今も垣間見ることができます。各々の家が田畑を持ち、農作業を行っているのはもちろんですが、電気やガス、水道などのインフラが整備された現在でも、各家の敷地内を流れる小川の水を生活用水として利用しています。サマーキャンプの参加者も「かやぶきの家」の前に流れる小川を利用した水場で野菜や食器を洗ったり、お茶やスイカを冷やしたりという体験を通じて、水の大切さを学びます。

また、「かやぶきの家」では、この小川の水の流れを利用して発電をしようという試みも行われています。名古屋大学大学院の研究室が、この装置を開発して必要な電力を発電するという実用化に向けて取り組んでいるのです。

このような試みが行われている一方で、この近くには日本最大級の規模の徳山ダムがあります。徳山ダムは、約1,500人の暮らしている



徳山村を湖底に沈める形で着工されたダムです。当初の目的の一つであった水力発電所としての機能を持ちながら、完成後は発電したことはありません。その話を聞いた参加者は、都会に暮らす人に電気を送るために、先祖代々から受け継がれ、生まれ育った故郷を後にした住民の寂しい思いを痛感するとともに、結果的に目的を達成できていない巨大なダムの存在＝環境破壊の問題に疑問を感じたようです。

里山暮らしを体験し、人々の生活の知恵に感動

「かやぶきの家」での古民家生活体験では、自給自足に近い生活を送ります。ここで過ごす間の食事は、予め調達した限りある食材を利用したの自炊です。お店が近くにあるわけ

ではないので、足りなくても買いには行けません。あるもので工夫することが必要になります。もちろん食事だけではなく、飲み物も自分たちで用意しなければなりません。到着直後に、「のど渴いた。何か飲みたい。」との参加者からの声に、「じゃあ、自分たちで用意して。」と言うと、日ごろは当たり前のように冷蔵庫に飲み物があり、また、簡単に買いに行けるような環境にいる参加者は、驚きが隠せなかったようでした。やかんにお湯を沸かしてお茶を作り、それを小川で冷やしてという手順を踏んでようやくありつけた飲み物を口にして、日ごろの生活のありがたみを感じたようです。また、ほとんど調理の経験のない参加者にとっては、食事の準備もとても大変で四苦八苦していましたが、みんなで力を合わせ、また指導者の力も借りながら何とか完成させることができました。自分たちが苦労して作ったことによって、残したらもったいないという気持ちも感じる事ができたようです。

「かやぶきの家」での恒例のお楽しみ「流しそうめん」も簡単には口にできません。そうめんをゆでたり流したりするという事を自分たちでするのはもちろんですが、その前にそうめんを流す樋(とい)も自分たちで用意しなければなりません。地元の方の指導の下、山に入って竹を切り倒し、半分に



割って樋を作り、それをそうめんが流れやすいようにセットします。今回は、そうめんつゆや薬味を入れる器も切り倒した竹を切って作りました。自分が使う箸を竹で作ることもあります。この体験を通じて、自分が生きるためには自分が汗を流さないといけないうことを学びました。

この地域には、野山に生息する植物を利用して生活用品を作るという技術を持った人々が暮らしています。例えば、手作りのわらぞうりやかご類、手織りの布、手漉きの紙など、いずれも心のこもった温かな製品です。

参加者は、工場で大量生産されたものとは全く違うことを肌で感じたようです。そして、元々日本人は、自然を上手に利用して、自分たちの暮らしに必要なものを作ってきたということも知ることができたようです。

「いただきます。」が意味する共生の心

「サマーキャンプ in ぎふ」の体験の一つ、禅宗の寺院での体験で、この寺院の住職・副住職が教えてくださるのが食事の前の「いただきます。」というあいさつの意味です。それは、お米、野菜、魚肉など食材の命をいただくのだということです。もちろん、それらを丹精込めて育てた人々や、食事の準備をしてくれた人への感謝の気持ちもあります。が、「命をいただく」という気持ちを感じることができれば、食材を粗末にはできないということを教えていただきます。また、食事のみでなく、身の回りにある日用品も同様です。それらを作るために犠牲になった動植物など自然のものの命をいただいて、自分たちは便利で快適な生活を送っているのだと知ることによって、参加者は「ものの大切さ」を感じられたようです。



食材も日用品も、そして自分が生活で使うすべてのものは自分のお金で買っているんだ。だから、どんな使い方をしても自分の自由だというのが現代人の一般的な考え方ではないでしょうか。しかし、ここでその考え方を切り替えて、お金で買ったものであっても、自分の使っているものは動植物など自然の中に存在するものの命をいただいて作られていることや、それらを作った人々の気持ちを考えてみる事が大切だと思います。そうすれば、決して無駄な使い方はできません。そうした一人一人の心がけが、ひいては地球環境を守ることに繋がると思います。

「サマーキャンプ in ぎふ2009」の参加者は、不便さを我慢し、一方で工夫して不便さを克服することを通じて、こうしたことを学び、有意義で楽しい2週間のプログラムを終了し、親元に帰りました。

◆お問い合わせ先

米日教育交流協議会(UJEEC)

Phone: 1-248-346-3818

執筆者/米日教育交流協議会(UJEEC)・代表 丹羽 肇人(NIWA, Fudehito)

河合塾で十数年間にわたり大学入試データ分析、大学情報の収集・提供、大学入試情報誌「栄冠めざして」などの編集に携わる。また、大学受験科クラス担任として進学指導を行なう一方、進学講演を通じて高校生や保護者に大学入試情報を提供。また、米国・英国大学進学や海外サマーセミナーなどの国際的企画も担当。米国移住後は、CA、NJ、NY州の補習校・学習塾講師を歴任。2006年に「米日教育交流協議会(UJEEC)」を設立し、日本での日本語・日本文化体験学習プログラム「サマー・キャンプ in ぎふ」など、国際的な交流活動を実践。さらに、「河合塾海外帰国生コース北米事務所」のアドバイザーとして帰国生入試情報提供と進学相談も担当。デトロイト補習授業校講師も務めている。